

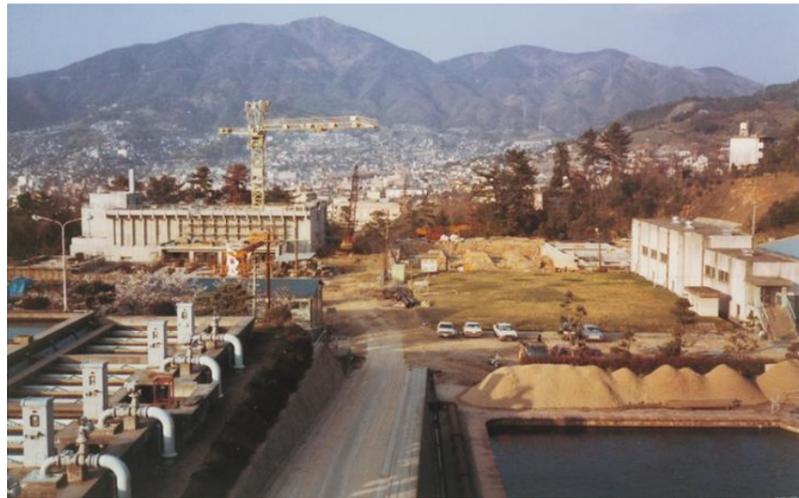
拡張事業の歴史を振り返る その3

■第6期拡張事業〈昭和58年～平成20年〉

■広島水道用水供給事業からの浄水受水を開始

昭和58年、広島中央テクノポリス構想などによる先端企業の誘致、都市基盤の整備促進といった情勢への対応や湯水の経験を活かし、清浄な水道水の供給を図る第6期拡張事業計画（給水人口242,000人、一日最大給水量155,700立方メートル）を策定しました。

これと期を同じくして、広島県が広島水道用水供給事業の一環として宮原浄水場内に計画し、昭和55年に着工していた県営宮原浄水場（浄水能力28,000立方メートル）が完成し、昭和58年7月から給水を始めました。呉市はこの内、14,200立方メートル/日の受水を開始しました。



▲宮原浄水場の一角で建設工事が進む県営宮原浄水場〈昭和55年頃〉



▲本庄隧道配水池西側坑口



▲本庄隧道配水池貫通式〈昭和62年6月24日〉

■浄水場の統廃合と合理的な配水体系への再編

国道31号に大部分が埋設されている戸坂浄水場から呉市内への送水管は、老朽化に伴い漏水事故が多発している折柄、祇園新道バイパス建設に起因する県立盲学校（当時）移転用地としての要請があり、関係機関と協議を重ねた結果、戸坂浄水場を廃止することとしました。昭和61年10月31日に廃止し、戸坂取水場として再出発しました。



▲戸坂浄水場閉場式的一幕〈昭和61年〉

広島県は、広島中央テクノポリス（東広島地域）への工業用水として、三永水源地から15,800立方メートルを取水し、呉市はその代替として県工業用水から同量を呉市内で取水することとなりました。この水を、県営瀬野川浄水場で県が浄水処理し、浄水作業用水分を除く14,200立方メートルを、新たに建設する本庄隧道配水池で熊野ルートから受水することとしました。

県用水を熊野ルートから本庄水源地地先で受水するため、本庄水源地の東側、石山の中腹に建設された本庄隧道配水池（容量6,000立方メートル、延長413.4メートル）は、昭和63年3月に完成しました。昭和63年4月から県用水の受水を開始したことにより、昭和地区等への給水能力は大幅に増加しました。

■黒瀬川水系から太田川水系への切替

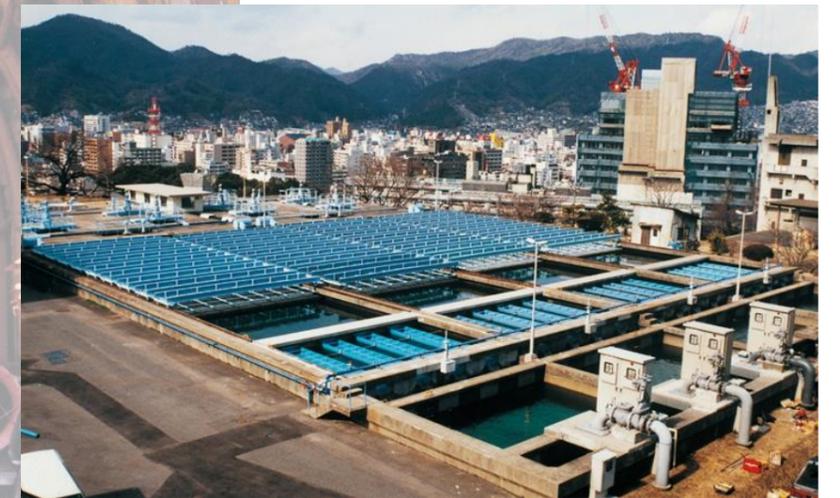
この時期に第6期拡張事業以外の事業として、石内浄水場水系の宮原浄水場水系への切り替えを実施しました。

当時、黒瀬川を水源とする石内浄水場水系は、水質基準はクリアしているものの、流域の生活排水の流入などにより、将来的な水質の状況が不透明であり、大きな課題でした。

このため、水質が良好な太田川を水源とする宮原浄水場水系に切り替えることとし、平成5年度から、宮原浄水場薬品沈殿池の改良や急速ろ過池を4池増設するなど整備を進め、平成9年3月に水系の切り替えを行いました。



▲宮原浄水場内：拡張工事中の急速ろ過池〈平成7年〉



▲宮原浄水場内：改良した薬品沈殿池〈平成9年〉

▲建設中の本庄隧道配水池坑内